

# 尻屋地先磯根資源調査

## (要 約)

長根 幸人・佐藤 康子・桐原 慎二

尻屋地先の磯根資源の状況を把握し、造成漁場を含む地先漁場の管理に資する。

### 試験研究方法

2005年6月7日に、太平洋に面する尻屋地先に15調査線を設け、各々の水深2.5m、5m、10m、15m、20mにある計72調査点に潜水し、海藻を50cmまたは1m四方の枠で1枠分、底棲動物を1m四方2枠分採取し、種ごとに個体数と湿重量を求めた。

調査線1、4、7、9、13、14から採取されたキタムラサキウニのうち、漁獲サイズにある計107個については、生殖腺重量を測定し、身入りを求めた。

### 結 果

#### 1. 2年目マコンブ

2年目マコンブは、水深5m地点から0.07本/m<sup>2</sup>が採取されたのみであった。生育密度は平均0.01本/m<sup>2</sup>で、前年同月に行った調査結果の0.3%に相当した。このことから、2005年漁期のコンブ漁獲量は、前年に比べ低減すると考えられた。

#### 2. 1年目マコンブ

1年目マコンブは、前年調査結果の6.1倍に相当する平均16.4本/m<sup>2</sup>生育した。水深2.5m、5mでは各々44.3、37.0本/m<sup>2</sup>で、他の水深帯の0.1–5.5本に比べ比較的高密度であった。これらから、2006年の2年目マコンブの漁獲量は、本年より増えると考えられた。

#### 3. エゾアワビ

省略

#### 4. キタムラサキウニ

キタムラサキウニは、調査点の86.1%相当する62地点から採取され、生息密度と現存量がそれぞれ平均2.3個体/m<sup>2</sup>、311g/m<sup>2</sup>であった。調査点の85.1%から平均2.26個体/m<sup>2</sup>、311.2g/m<sup>2</sup>の生息が確認され、前年に比べ密度が4.3%増加、現存量が5.3%増加した。1995–2005年までの10年間の平均密度（2.17個体/m<sup>2</sup>、333g/m<sup>2</sup>）には大きな変化がなかった。佐井村地先では、キタムラサキウニが100g/m<sup>2</sup>以上の密度で生息する場にマコンブが発生・生育しにくくなることが知られている。本調査場所では、キタムラサキウニの食害による磯焼けの発生・持続が懸念されるため、その生息状況を注視すると共に、漁獲等により適切な密度管理を考慮する必要があると考えた。

発表誌：平成17年度尻屋地先資源調査結果報告書。青森県水産総合研究センター増養殖研究所、平成17年6月。

キタムラサキウニの身入り（生殖腺指数）は6調査線上の21地点を調べた。その結果、水深2.5、5、10、15、20mで、各々平均20.0、19.1、12.7、6.1、6.4であった。水深2.5mと5mでは、2002-2004年の3年間の平均の各々21.1、20.2に比べ94.8%とやや低い値となったが、水深10、15、20mのものでは、2002-2004年の3年間の平均の各々17.3、11.6、8.7に比べ52.6-73.8%の低い値となった。